関東古戦録

五

備[illegible]

関東古戦録巻之五

目録

㊀足利太郎生立附竹澤泉崎事
并不思議事
㊁長尾監物為明山形八郎季照太郎と君臣契約事
附長尾智謀之事
㊂城戸次郎太郎持廣太郎と君臣契約事
附霧浪逸平事
㊃鹿嶋悪次郎出陣附小楢と仕合事
附長尾三英士集會事

関東古戦録巻之五

足利太郎生立附竹沢泉崎事
并不思議之事

上野国妙義山の麓に、一人の土の主あり。権化太郎と号す。民間の小人となれども、天性活達大度にして、慈仁充深し。一度相逢者、老若男女其徳風を慕はずといふものなし。其出生を尋ぬるに、古河の足利成氏公の御家領の補佐よ因て、威勢いかめしき折から、妾腹の男子ありしが、衆妾の讒によりて、終に追去れて、爰に潜住せりしが、後成氏公も其行状を悟て、嫡子の沈らて、其光の太刀に、二ツ引両の旗一流を添て、対面あるべきよしなれば、母子大によろこびけるが、成人の後病身にて、世に出ることあたはず。妻を娶て、母死して後、妻懐妊しけるが、男子ある

村が北斗星を呑と見て、月経即滞事十三月にして、一人の男子を出生す。此時白き光宅中に満て、人々大に怪めり。太郎と名付く。村中是神佛の化身ならんとて、権化太郎と呼ぶ。此子三歳にして父没す。（延利九郎と云生年廿三歳）大永五乙酉年なり。母是を撫育して、稍々に生立ず、幼より智量ありて、多くの子供等を手下に従へ、或時幼児数人とともに山川へ出て、釣をなして遊び戯れ、日正に暮んとせしに、太郎六歳まて、真先に進て、一同に立帰る所に、煙気の細き所に、年ふる狼一疋撰追て、猛き者を座るごとく出んを見渡せば、或は又六間余隔ていくつともなく伏し居たり。童共大に泣き恐て立帰りて、郷村へ逃んとす。太郎押止て、狼の例に立寄て、己等吾々を食んとならば、見繹縁するとならんぢありつつ吾を恐れて待居

るとみえたり。吾亦汝を殺すに心なし。路を開て通すべし、速帰することなかれと、同の童を引て例の岩上に上せ、一人狼前ちかく立寄り、勇威蓄心へ激しけん、其狼跡を顧て一声高く吠て、太郎が前をさりて、跡の狼是に従て通り行。太郎少も恐れず、頭を撫て脊をさすり、十疋余の狼をやり過して、童共を呼出し、各跡に下りて、悠々として立帰りける。童共家に帰りて、親兄弟に語りて、太郎が所為を告ぐ。父母大に驚き、悦て持参す酒饌を調て、太郎が母の宅へ持行、恩を謝す。母心中に危く思ひけるを悟り、悦といへども戒て、すべて大胆の行をなさしめず。十五歳に及て、内典外典に通じ、兵書の巻をわり、兵器に跨て、馬の足並を試み、弓矢を執て獣を射る。一郡皆感

て倍稽化の人なりしが、大坊の友達の内、竹沢平次、泉涌寺
殺と云もの、富家の子なりけるが、太郎に随ひて、実に君
臣の礼のごとし。毎も二人を携へて、太良とむつましく是栽
す。これによりて弓馬鎗太刀の業、漁猟の遊も、此二人は形
に影の添ふがごとし。或時太郎二人と倶に利根川に殺
生して厩橋の人家に入て、食事を調し、二人は所用ありて
跡にありしが、太郎一人船に乗て、二人を待合する内、睡眠に
及り。折から梶原美濃守賀役厩橋より内路の途、此所を
通りかゝりしに、馬足止て進ず。梶原見るより馬上の達者殺
渉の手綱をもつて、手早に一度身震して動す。美濃守驚きて
下りして引立れば、死のごとし。すれば又跡退りして、すゝ
めす。是において、梶原心付、馬は未だ主を知る異獣なり。此辺に

神社ありて、不敬をとがむる者ならんと、静に下馬して四方
を窺ふに社祠なし。所の者を近付て問ふに、竟に馬止め此池
をさかどといふ。梶原弥怪て、漸く立止りて、思案をせしに、
側の船より、隠くたる白気の起を見て、此船に故あらんと、
立寄て見るに、十二三歳斗の若者只一人、楫を枕として臥
居たり。美濃守驚きながら、馬止めの主ならん、偖しも如
何なる者やらんと、稍行過て、窺居るに、竹沢泉涌寺立帰て、
太郎を驚かして、船に乗れば、太郎起上て梶原が方を流度
見やり、纜を解て、漕出せり。梶原思はず横手を打て、虚空
明王起るは、かくのごとく、瑞徳あるものを守く、いさゝまゝも
奇異の曲者など、人を走せて、人家によりて問しむるに、
牧義山の稽崩稽化太郎とて、まうす者なりと、告ければ美

譲らざれを守て、志あれハ氏系あるものにあらず。天下動乱の時かゝる英雄起て、天下一統の功を顕さんもはかられねど頻に手を人物の志のほしく、主に尊アんハやと思ひけれども、他人の思んもいかゞぞとさあらぬ躰よく、又馬に打乗て、武蔵をさして急行ぬ

長尾監物為明山形八良季照太郎と君臣契約叓

附 長尾智謀事

或日、足利太良、竹沢泉嵜と共に山に入て、猟をなす。太良鹿を追て、山深く分入、遂に鹿を見失ひ、帰路を忘て、大いに労し、飯笥を開て、これを食し、岩に腰打かけて休む折から、竹沢泉嵜、一人の士と戦て、あへ太刀先乱て、追られ次第に退き来る。其士を見るに、面目秀麗美女のごとくにして、太刀打の術、透間なく、あはやあへ人手の下に命を落さんとす。太郎大に驚て、大音上、あへ人愁ることなかれ、太郎爰にありと呼て、二尺八寸の吉光の太刀を引抜て、雷電のごとく馳よれバ、二人ハひらいて息をつく。彼士ひざり、かしおしこ、太刀振廻して討てかゝり、志バし戦と見えけるが、飛しさりて、一言のいふとありが、卿ハある人にや、太刀をからりと投出し、大地にどうと坐し、座を組たり。太郎も不審、されバ太刀ひさげて、何は互ちやう、汝が太刀打、尋常ならず、何れぞ術べきの術にあらず、然るに戦ず、にしてかくのめ、さお見ゆまいかなる故ぞや。彼士詞を改め、某ハ山形八郎季照まふせと名のり、弓馬の術に達し、荒業太刀打もかくのごとくに練磨せりしが、彼二人と不慮の口論に及び、ここに

極まりて、是非なく切害せんと思ふ所に、足下と云今時不意り、白光眼に遮て、腕をひきまて、蹌踉にまろせず、思ふに神人ゟ、且氏京正しき人にあらずや、と疑惑生じて、かくのごとくなり。姓名包まず語りぬ。ちゝ上に我一命を汝が身の上に任せんと思ひきりたる有様なれバ、太郎も包みつゝまれず、我こそ足利成氏の嫡孫、足利太郎といふ者なり。汝誠に吾家に心あらバ、今日より吾に従ひ、志を助けよかし。と、念頃に云けれバ、八郎大に悦て、当時天下大に乱て、戦止ることなし。京都足利家将臣下に奪れ、古河晴氏公、北条氏康に制せられ、中興の期あるべからず。何卒足利家の氏族、民間に飄流して、大器の人あらバ、従て大業を立べしと、八方を周遊し、是を求るに不期して、君に相逢と、誠に天の寵福此上なし

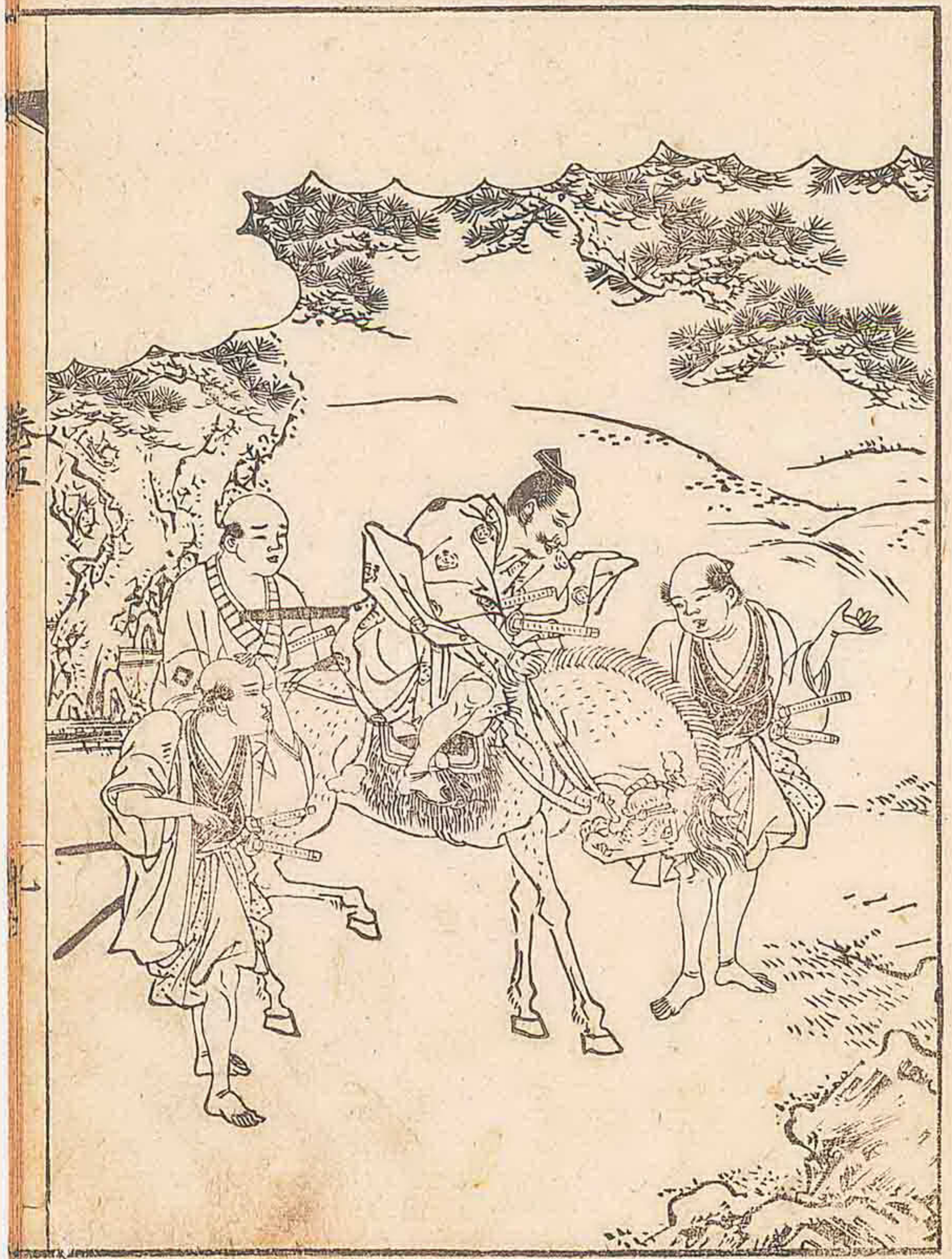
と、始て君臣の約をなし、竹沢泉寺も対面し、皆あ今、賂て太郎ゟ京氏を守て、八郎に次て、君臣の約をなせり。これより太郎の家に八郎を住ひて、母儀にも対面し、之より竹沢泉寺が富家なれバ、村々の貢あつて、家事も乏しからず。三人を伴ひて、日数近村に周遊して、業を試ぜしふらきを僕しく月日を送られけるに、折から同国平井の城に相撲の興行ありて、近村の諸人馳集ることあり。太郎三人と行ておれを見られ、観場を囲んで、雑卒非常を制し、物見小屋を建て、下知を伝ふ。まさに厳重なり。四人観場に入れバ、高く桟布を掛て、官領氏が左輔憲政見物なり。諸士恭敬して、誠に王公の儀式も、此上なしと見たりげ、太良熟々とこれを見て、彼の河越の夜軍に大敗して、天下に

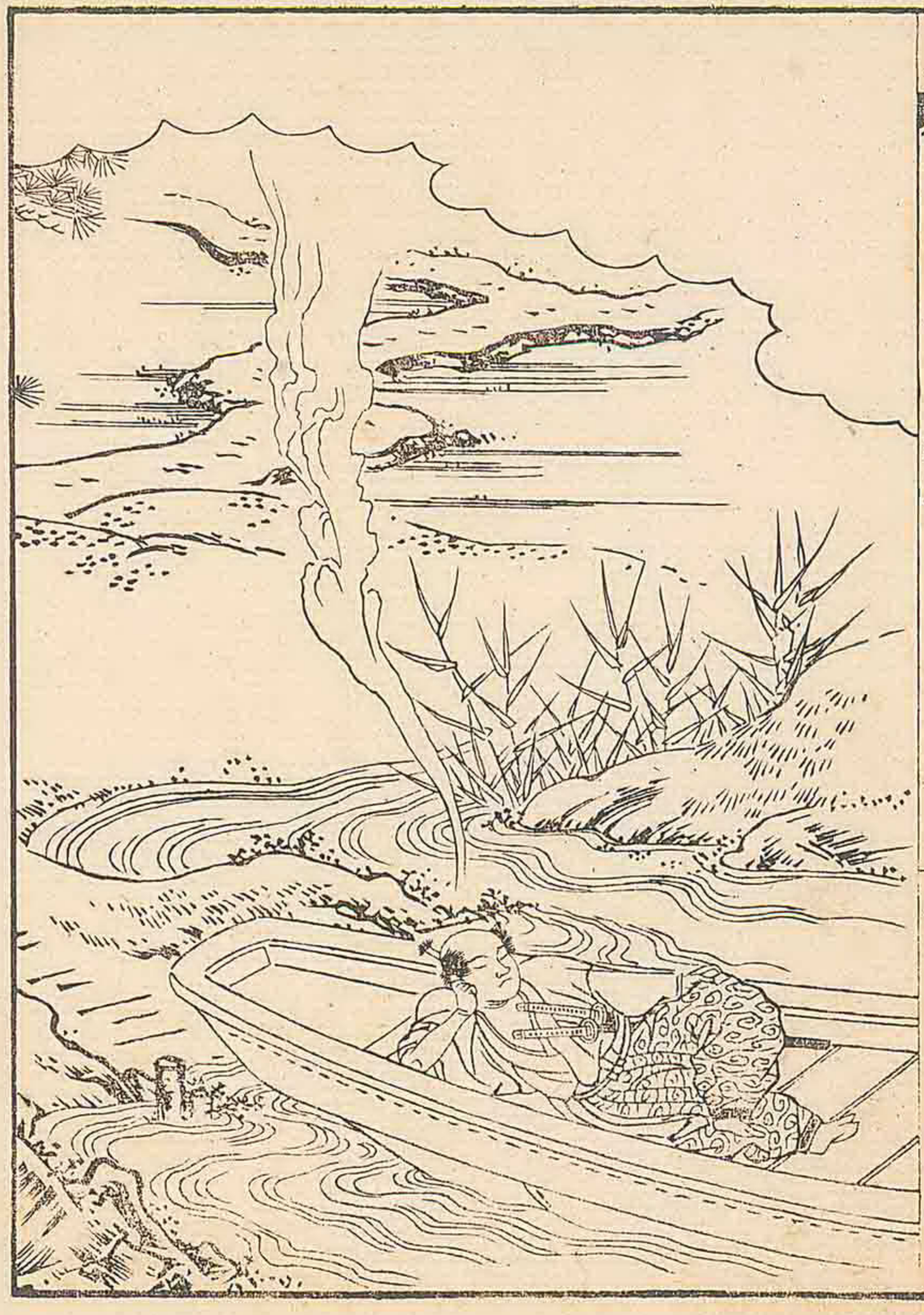
嘲笑せらる。然いまだ悟らず、猶に募りかくのごとく物をなす。然れども、実に我臣下なり。吾ハ角匹夫の姿となり、彼尊ぶこゝろも、自ら権威あり、天命それが何ぞやと、憤りの心頻りにして、思へども若丈夫なれハ、雑卒等ハ侮るぞ。元若侍尾籠なりと、棒をとつて、まへ一を打ども角らぞ。八郎腹にすゑかねて、にくき己原、主人の頭上に棒を当バ、一々に切伏んとて立上らんとするを、太郎急に押留て、我身を縮め、神色自若として、終日心よく見物して立帰るときに、雑卒等も八郎を指さして、先刻あの色の白き男であり、吾々が制するとき、雑言を吐けるが、今一人の士の、よくも止めける故に、穏便にすませし、御威光をもつて制をる者に向て、敵対せんとするハ、誠に命しらずなりと、嘲

るに山形今ハ、かゝえかねて、飛起り、両人をとつて投出し、押へし者を引捕て、小児のごとく押すくめて、既にかゝらんとしたるけるを、太郎猶二人立かゝつて引除け、太郎扇をもつて、八郎を散々に打擲して、役人に詫言し、無理に引立、其場を立去、とある宿はづれの酒店によりて、八郎に向ひ、大望抱く者ハ小恥を厭ハず、我寛政を見るさへ、家臣の思ハるも、況や雑人原、誠にうごめく虫のごとし、彼が類と争て身を失ハゞ、徒に浪者の名をとられて、大義の企いづれの身を以て成就せんぞ。古人も万徳一忍にしかずと云り、向後ハ慎で血気の勇にはやる事なかれと、深くと異見あれハ、八郎理に伏して、誠に一旦の怒にたえず、君もし事を損めのハずんハ身命を徒に失ん、恥入に堪たりと、涙をおとして、心服して

れバ竹沢泉涛も共に威波を流せり。時に一同の内より郎等ながら、権化太郎殿は御前に召るべしと、襖を押ひらき立出る士あり。驚てこれを見るに、威儀堂々として誠に万人に勝たる人品なり。静に太郎に打向ひ、某は越後國の産、長尾監物為景と申す者なり。幼より下野の二荒山にて人となりつゝ、異人に逢て軍略の奥に達し、何卒名将に従て犬馬の力を尽し、天下を一度匡さんと思へども、当時の諸侯実に天下の器にあらず。猶吾日本姓氏を尊び、義にいさむ風俗なれバ、氏姓正しき有徳の人を尋るに其人なし。今日相撲の場にて、風渡君の形相を見るに、其器凡人にあらず。側の人に問へバ、妙義山の麓、権化太郎と号するよし。[illegible]對面を冀と云ども其機なかりし。此所へ来て

岐路を待掛、雑卒あらそひて搦まつて君を打んとせるに、咫尺にして、こち横者に当らで、二人の英士既に扉の開くを押止て、神色少しも変ぜず。猶更只今英士らの驍健、誠に勇士名将の器量あらはしたり。其上君の為、後光に白光ありて、これを知る凡人の眼にみえざる所にして、英雄剣気の術に達する者か、且君に仇する者にあらずんバ、これを見ることあたはず。君が系氏正しくんバ、某今日君臣の約をなして、天下草創の謀を定むべしと、口弁流るゝがごとく述けれバ、太郎殆満足あり。長尾の英名是まで[illegible]ありて、折あらバ尋行て、ひたすら頼まんと思ひしに、時至ての對面悦にたへず、何をかつゝまん、我こそ足利成氏の実孫足利太郎といふものなりと、





亡父氏同に落たる始末、家の籏義光の太刀儀式頭一ニ行譲りたまへバ、長尾志す所て額を地につけ、実ハ氏と云る器量こと云、天の派せる明君なり。我不肖なりと云ども為め神出鬼没の謀を以て、必天下を定べしと、[illegible]上盃をたまハりて、君臣の契約あり。[illegible]竹沢泉崎各對面して後、長尾懐中より一軸をとり出し、これを披くに、坂東の國図細密にしるし、郡國のあたりに、と諸國の利害を記るにあり。いせん東國を平夷して、これを根本とせんと専要なり。早天下に旗を上るハ、海道にしくとるべし。然とも諸侯並立て、一所の領地なくんバ、鋒剣をす事能ハず。東國ハ事情疎にして、一領地を得るに早しかれ當時の権道なり。思ふに管領の運すでに傾き、小

条氏康、登天の勢を以て、関左を呑こと久しからずして、憲政を亡すべし。然ども北に長尾景虎あり、西に武田晴信あつて、氏康全く東國を平治なすことあたハず。三雄鼎峙の時、されば吾功を立るの時なり。安房の里見ハ一俗の使を以て一和して後援となすべし。北条家既に晴氏公と縁家となりて人情を得る。されど争ふ時ハ功すくなし。不如常陸へ手を伸して、根本を固ふし、越後に牒合して義兵を作へハ、京虎元より義勇の将なり。必応従せん。是に於て晴氏公を奉て、君を嗣となし、氏康と手切して、京洛ハ景虎に手を残伸させ、東國を切靡て、海道より押上らハ、大功必立べしと。一紙書面の上にして、後来を慮ると神のごとし。太郎大に感じあり。吾も尾を得るとて、龍虎風雲の時をまちたりと。

躍上て歓喜あれハ山形始三臣も其智略に心服なす。然乍重て申けるハ時いまだ来らず。唯人にさとらせざるぞ肝要なれ。其内密に英士を試て多く義党を結び事を成べく謀るべし。臣今日君にわかれ下野に帰り、書信を以て事ハ城傳へ時を定めず来り見え給ふべしと、細に語りけれハ太郎て菊童殿にこれより引別れて家に帰る。三日星文庫に築舎も不思議なりける次第なり

城戸次郎太郎持廣足利太郎と君臣契約事

附響浪遊平事

去程に城戸次郎太郎ハ去年忠の城を走てより響塚が家に隠れ居て僅に近村を尋ね、莫小群を拵て志あるべき勇士もなけれバ心中へ打越んと響塚に趣旨を語りける

小響塚も志あるべしと領掌し、幸関城に我同姓響浪遊平といふ者あり。先かれが方へ潜越あれと、両人の下部を附く長堤に差至て熊谷堤を打過て本庄の宿をつま、樹木繁くたる中に一家あり。二人の者先達て案内を行を通すれバ早速遊平出むかひ、両人を旅逆によく入れ。仁王城仍り揃しあるまじき荒者なり。持廣伴て彼が家に入れバ遊平情で響塚が心彼の君に来だりがたき孫に存ぞへき、むをさしなく窮てこ滞留ある迄しと、健気なる一言に城戸も心落着て二人の者を安し、漸く夜に足を止め、日々撿術の助を頼し、早業太刀打を以て同様守に日々業に心殺して倍是を励へり。武蔵城戸一人小座敷に隠居として越方を思ふまゝ生國を放まとくかくのごとし。偶とし て籠城

の家を居所として年月を送ると武士の身にはあらず。是に付ても一色に楮く行末覚束なく眠もやらず居たりしが数年ることく逸平がまた獲物とを持して勢よく帰ることもあり又ハ手合もなく徒に帰ることもありしか手柄なる獲物猟を得ても皆暴にして人間の所業にあらず絶えたる人の盗賊やもちは吾々が義山の禁制にする家なるが四十有余の女と十二三歳の男と住居せりしが此僕貧なりしず盗み取る金銀もあるべき様なる故此柵邸入て様子をうかゞふに門に入れバ自ら心揺れ身震して足をも止めず門外出れハ又元のごとし いかさ悔ても神仏の札有て其家を悩かすべからずと盗りけるよ其れより賊も夜もあり し彼も前ありしと村中人一同にすまして居る城戸芳浪

才てそれとある彼権化太郎が家なり。たとへ泥に忍入たりとも彼と相合ふ事叶ふべからず。既に捕る数の泥棒も彼が例を案じ打して召止めにあはれしなりと噂をして深ぬ様に此物語を噂て世には不思議の者もある者かな。吾試みに行き対面せん縦れども盗賊を召連て彼が働をもみんと翌日逸平に向ひて此頃物語の権化太郎とやらんが宅へ、故今宵忍びこみ様子を窺んと云ければ、逸平聞て男の武勇をおそれたりと云へども、太郎が宅へ入る事ハ思ひもよらず物さんに任せまじ。せんかたなく様子を伺はんも一理あり。彼ハ家も名高し。と城戸芳浪、根本猪之八、三人男を固で云出立て猪之八が様子て京十丈余の垣を越て城戸が合せこれより四人が義を抱て急行て既に棟にありしが

ハ逆平先に立て走り、太郎が家なりと云ひ、城戸に立寄て見るに、かりの柴戸計よしもなく、恐るべき構ひもなかりしかば、真先に余十太夫、根本植之八、木戸を引てつと入、一二間入ると見へしが、先を窺ひして立出る中、京浪抜て踏出しが、あれも同じく立帰れバ、持廣太が庭にて、縦令猛火の中なりとも何程の事あらんと、勇ミて欠入しが、同じく跡へ立戻り、不審や家の内より湧くる白気起て、眼をくらし、手足を縮む、思ふに妖術を行ふ曲者ならん、[illegible]して捕手掛見んと、大音上て、太郎殿へ上意あつて来れる者なりが、夜明給へと呼バ、下部すべて燭を挑げていなさへ御入あるべしと、案内して、帯戸を開けバ、城戸を始人押続て込入しか、又茫々として勇気撓ミ下部に従て一間に立入て座を

しむれバ、間もなく太郎刀を横たへて立出る有様、威儀整ふて穏ならず、百万の大将といふ共、此上あらじと、城戸始見えど平伏なしければ、太郎詞を正しくして、夜中と云其の躰たらく、全く盗賊の風情也。縦計を開かずとも、猶我ハ某一人なり、業を以て勝負を決せ給へ、偽り謀りして人を陥ハ、女人に等しき業なるべしと、一言胸に釘打ごとく、持廣稍く詞を出し、扨しも御身ハいかなる人にて、剛勇威あるけるや、何をか隠さん、今宵忍入て、御身の武勇を試んと、先刻より忍入ども、眼くらみて足すくむまで、いか成術かわからざるぞ、願くハ御身の家系をうけ給ハり、何卒義を結びく、一方の力ともならん所存なりが、某ハ城戸次郎太郎と申、浪士なり、あれなるハ余十太夫、京浪逆平、根本植之八

と申し遠波の棟梁なりしが、礼を厚して述ければ、一間よりも母儀立出て、陰よより顕れ出るをなし、汝等こそ古河の足利成氏公の嫡孫足利太郎なりしが、家の旗を押立んせ給へハ次郎太郎なり、是ハ城戸駿河守が幕縁なり、父安房守よ沈淪して、何卒足利一家の若君よ廻り合、命を捨く忠功を尽さんべしと、家よ命ぜし故、数年國々を遍歴し、今日今宵積憤相晴、普代相伝の明君よ出会る、生前の本望此上なし、あはれ御下にこそありし、召仕れ給るが悦しく涙を流しければ、太郎太夫よ従者ハ、五郎も喜さとと共につく英士を求めて、天人稀なり、今晩より御吾を補佐して再び家の栄を見らんべしと、盃を給はれば、城戸ハ其の地よ手て頂戴し、のこる三人文武双の勇士なり、彼れも臣

下に召加へ給ハらバ、素懐まよ有ることかあらんと、三人も同じくひれ伏て願ひれバ、何ぞ異儀よ及べし、一夜よ英士四人をまで得ること、家運の開る始なりと、従者ハ相共よ長尾山形ごとと物語ありけれバ、城戸も一色小楯が旗して、押付給ふも猶しからんと、御事あらね風情なり、これより労浪ハ根本ハ宿所よ立帰て、折く尋問し、城戸ハ太郎が宅よ移りて、山形三人よ給仕ありけるが、山形ハ本国あつくへ、出羽國へ赴しが、下野にあり、長尾が運て城戸を始、三人の者が物語して、羽州を志して急ぐ

鹿島悪次郎変附長尾三英士と集会之事

抑常陸國鹿島大神宮ハ古の荒人神、武甕槌命を祭て、末世ことにも霊験あらたかにして、武人の崇敬ことに厚く、凡く此地よ武術を好む者、皆是を神道流とて尊に従

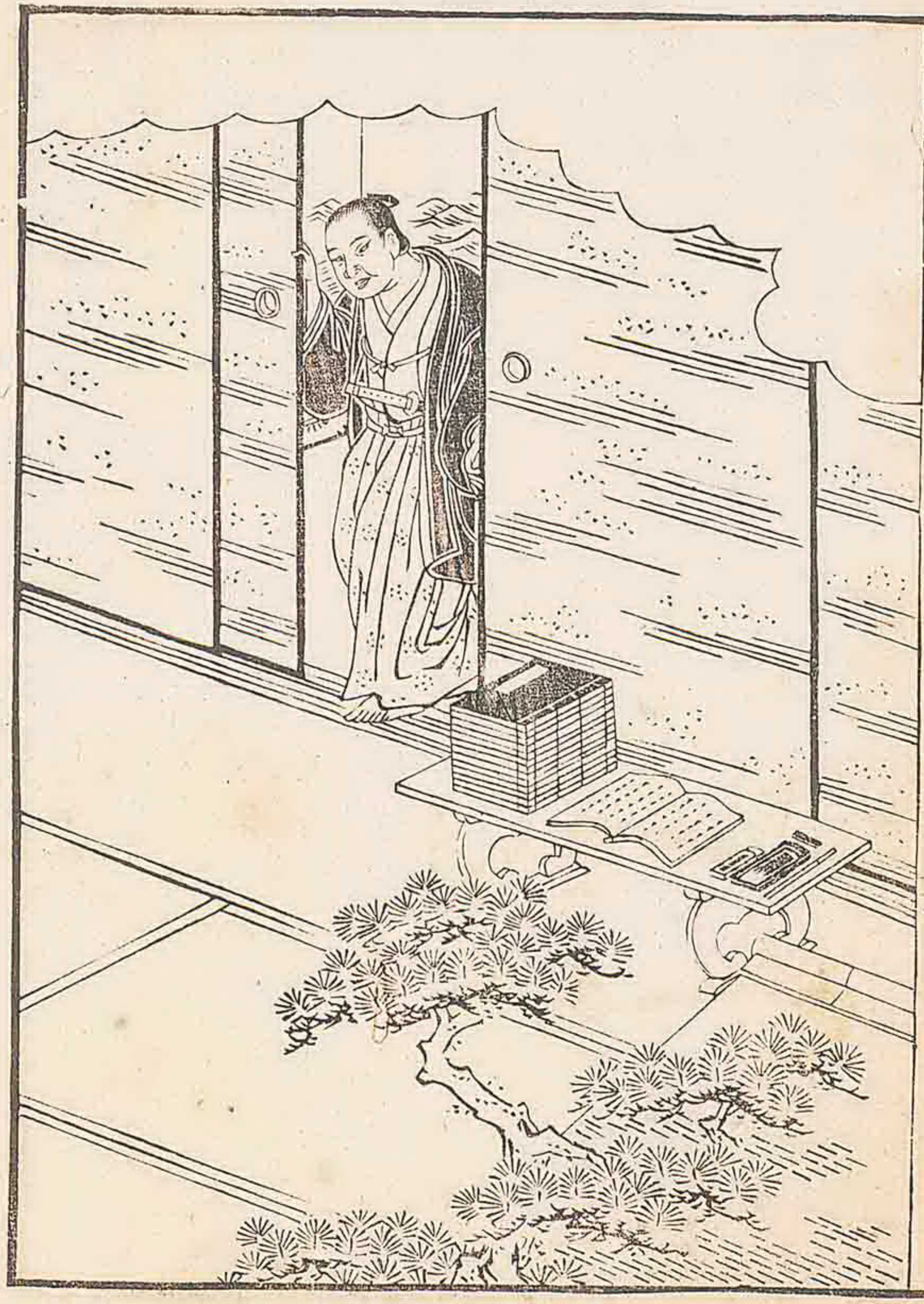
ゝ葉に絶ゆる者多く肥前国猟人又強暴にて麻鳩悪次郎（某と云人）といふ老者あり此母或夜井に到りて水を汲摘するとてふと北斗星の影移りたるを見て母悦んで手に掬して是を呑む忽に懐孕せり夫婦驚てこれを奇絶し息出たり。それより懐妊して産て悪次郎を出生せしに生れ立凡人ならずすぐれたり。幼して父母に離れ母方の叔父阪田氏に養れしが今年已に廿四歳生れ付大猛不敵にして力量普通に越て志猛くて義に勇めり。師を定て修行なさずと云とも天然剣術に熟練して十数人にて囲んでこれを撃んとせしにも電光のごとく少しも形を見極ることなし。元より藝を励すの人情悪を嫌ひ人これを殺んとするを悪次郎夢にもしらず或時人家の座敷に昼寝たり。数日恨を

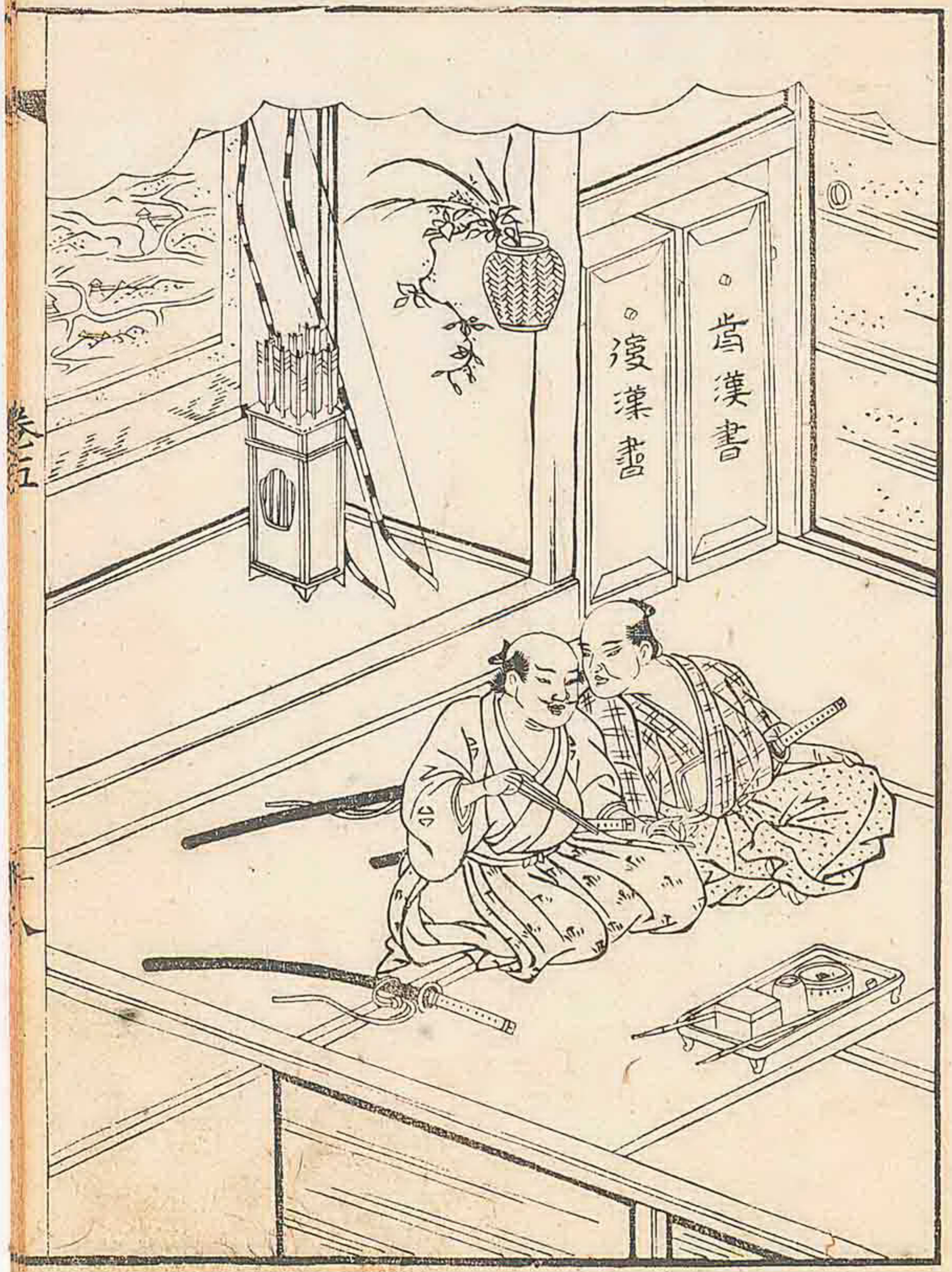
含む若者廿人斗そと透間を窺ひ四方より詰寄りて熟睡の悪次郎を一同に切かゝるに影のごとく消て縁先に突立上り猶刀抜より早く片端より切立る。其余は逃さじと探て四方の戸をしめたれば却て一人も逃出ることかなはず残らず切殺されたり。悪次郎十分に仕留て血にまみれし躰にて大神宮へ参詣して武運を祈る。毎たよりて他国へ去んと思ひし大木の影に体を居たり。此時一色左京太夫時範此所を通る比地に来て兼て麻鳩が人物を称して見合けるに今日此騒動を守付て神前へ参詣り樹間に出合ふと見るよりは是下服よかくのごとき大変を仕出せり。何で早く此地をさるべけるや。麻鳩か回吾もたてる。なんずれ共便船なし。故に密に志のびゐたり。一色大に諭て回万一殺されし親族が聞を入て

此国にハ悔るとも甲斐あるまじ、早く出船なさんにハ、さりとて、其方に行べしと、海辺に立出るに便船なし。一色船頭に出船せん事を請に、船頭賄を貪らんとして肯ず。一色大に怒り、人をも乗ざる船海上にあつて益なしと、腕先を延し、苦もなく陸へぐいと引上げたり。船頭顔色青ざめ、のゝく〳〵ふるひつゝ、さらば船を出さんと云。是よりいそぎ支度をそろへ、船頭と共に波上に押出し、忠次郎ともに乗んとする時、追手の者数十人馳来りて、鹿嶋すこしも恐れず、一文字に切てかゝる。一色も[illegible]、船より躍上りて、これを助けんと、数人を切払ひ、立帰れバ船頭[illegible]恐れて、船を纔に漕出せり。一色見るより、推参なる船頭めと、二丈余隔たる船の間へ飛鳥のごとく飛こえバ、鹿嶋も続てひらりと飛乗て、船頭の首を一刀に切落す。一色驚き、早まつたり、彼なくんバ船をやる事あたはじといふ。悪次郎打笑て、当地の生れ、海上を見る事陸のごとしと、自ら櫓をとりて、これを漕ぐ其早き事矢のごとし。一色も感賞して、船中にて心底を明して、義を共にせん事を頼る。鹿嶋斜ならず喜び、吾彼地にあるハ民間の溢者盗賊の身と朽果ん。兄の恵によりて危を遁れ、信義をもつて世に立んと、人間の本望何か是に越んと、終に誓約して、利根川をさかのぼり、戸頭に着船せり。此にて一色ハ戸頭に、鹿嶋ハ布施へ引分れて、船より上り、一色ハ蓄たる金銭多く、食事を調、弁才天へ詣でたりし、日暮に成けれバ、今宵ハ爰に通夜せんと、拝殿に並び伏く、何となく剣術の

妙不測に至る者こそ出合して其業を試みさせ給へれど高邑に源流を唱る時是れも通夜こ身をもたる士一人剣術の妙外にあることなし、某と立合て業を試みしと望みて學廣庭へおり立其ハ廉嶋何がしハ撰ぶべき同庭へ出りて互に太刀を抜合せ爰をせんどと戦ける、折節十一月十五日、月ハ東より明よ切合白刃光残添て一時斗挑戦せしが互よ左右よさりとし潮く休居たりしよ、思ひとどめて二人が詞をそろへ爰かくのごとき剣法の正しく透間なきさおとりんぞと云けるよぞ、廉嶋打笑て、いかさ爾もふしぎの縁よよつて劍業を試られるに、天晴名譽の達人なり、よしや運つきて、是ふうち所しうも、よしなき事なるよ、秘法を寄してこそに此業を磨るバ、恐らく関八州よ猶つく者ある

座ふらず足下のごいかんと云、彼士これを聞て感じいしぜも宣者よて我も左こそ思へ、某ハ小楯半七郎と云者なりとこに廉嶋太に驚き、備ハ一色氏と義を結ぶ人なるが我ハ廉嶋悪次郎と申て、一色氏と同船し先刻左右へ別れたりが、我不慮の災難、一色氏の恩恵よて免れ、是より私中よく義を結びたりと、竹符を出してうれ是へ證備も危き次第なりと、夫より水魚の交をなし、其夜ハ錦廠に通夜し、共よ心底を語りぬ、夜明ぬれバ二人形よ立て、又戸頭に渡り、一色が消息を聞よ、下野の國へ越たるよしかの聞ゆれバ、二人又打つれて下野の國へ打越宇都宮左衛門佐の城下よ至り、酒店よ入て食をとりし、酒肴を求て暫旅途の労を休し、往還俄に騒ぎ立、あれよく




前漢書
後漢書

立騒ぐ。何事なりと問ふに、此程那須ヶ嶽の猪狩に一匹の荒熊、矢に當らず、勢子大勢を引裂捨て、それより折々里に出て人民を悩す。多の猟師これをねらふと云へども、今に其功を得ずと云へり。人家より見て居るに、多の往来の人々横に逃散る。跡より彼荒熊人のごとく立て来る。丈一丈餘り、雄荘古怪誠に恐しき有さまなり。一町の内門戸を閉て逃まどふ。其時一酒店より旅の士と見へて出けるが、醉に乗じて躍出て熊に向ふ。諸人是を制し止れども耳にも入れず、進て間七八間に及と、彼熊怒れるの躰をなし、一文字に飛掛るを、彼男引はづして、熊の横腹を足にて蹴ければ、少しひるむを、飛掛りむずと組、金剛力を出して責め付れば、熊ハうめきて振ひ放さんと争ふ所、大地を堀立、石を飛事雨のごとく、うめく声、膽を通す。始ハ恐れし町人共、此有さまを見物して、稲麻竹葦のごとく立並ぶ。暫有て、さしもの荒熊、氣勢力尽て弱る所を得たりやおうと、大地にどうと投倒し、荒縄をもつて咽をくゝり、馬乗に跨てこれを追ふこと、手飼の犬のごとく、熊ハ主人の心のごとく歩む。町内へ乗来れハ、あまりに恐しく、此熊を生捕して乗来るハ、天魔疫神ならんと、見物の人数裏崩して逃去たり。小楯康嶋も奇異の思ひをなして、近よるを能見れバ、一色太郎左衛門時範なり。大に驚き且喜んで、思ハず外面へ馳出て、両人共に斷を擧て、爰に来れど、今に始ぬ怪力、誠に樊噲も及ばじと嗟嘆されバ、一色急度見て、何に小楯鹿嶋の両英なるぞと、熊のつなを下

て手に手を取て、共に旧懐を述べ、盞を大地に擲置て、三人又酒店に入て、酔を尽す。諸人仰天して、此鬼神と念酒なる二人の若者ハ、嘸うし、さてこそ老なるらん。酒店の亭主ハ心ならずあるらめと、取々にひしめきたり。三人の者共亭主を呼て、此辺に武芸にすぐれし人やあると尋ぬれハ、城下放れて一里ばかりの所ほとりに、長尾監物といへる先代の浪人あり。兵法の名人の由、当城の主も召抱んと、度々迎を給ハれども、奉公の望なしとて、浪々の身にて年月を送らるると委く語れハ、三人悦び、何卒汝仲人となりて、其人に引合すべしと頼けれバ、亭主安々と受合ける。一色申けるハ、先御身両人往て其業を試むべし。其後我行て対面せんと、相談して両人ハ亭主を伴ひて出去ぬ。一色ハ酒銭

を過分に其妻に取らせ、又熊に打乗て、元の旅舘へ立帰れハ、亭主歎て申けるハ、此熊当所数人の親類の仇なるに、此侭に生置かバ、此末いかなる害をかなさん。何卒殺して、諸人の恨を晴し給ハるべしと願ければ、一色打點頭、人間の霊なるを、畜類を以て是を殺事、彼ら天罰遁るゝ所なし。我諸人の憤をはらし得させんと、件の熊を大道へ引出せハ、是を聞諸人集て見物す。一色熊に向て、己が身も畜生せぬ大罪をなして、多く人を殺食ふ。天の攻今至れり。心よく死すべしと、縄を切て追放し、刀を抜て一刀に両断に切分たり。見物の諸人一同に数日の恨、百人の難を救ひ給ハること、ひとへに君の大恩なりと伏拝て、各酒肴を進めければ、時節限なく喜悦して、宿に入、数盃に酔を催し、

此時鹿嶌小猾両人ハ、酒店の亭主の案内して、程なく長尾か家に至りぬ。仲人内に入て、座布へ請入らたに、人間界の住居にあらず。さよのうふして、心自とはるゝに、机上に数巻の書を置き、東八州の国図を床上に掛並たり。主人さへやさて必出家世捨人ならん。中々武道の人にあらずと、打笑て拙へ居るに暫ありて、襖を開きて立出る姿を見るに、色薄おき眉こく、眼中佐有て、腰に短刀を挟て両人の前に立向ひ、酒店の者物語よく、御姓名兼り届たり。誠に一騎当千の英士、末頼母布ある存られ、備しも某武名ありて業鍛錬の者と聞ゆも、業を試ん御望の由誠に厚き志なり。某天性儒弱にて、鎗剣弓馬の藝ようとく、唯乱を制し、治をさむるの道を得たり。兵法と云ると、戦場の下知を加へ攻城野戦の術に達するを云。然るに民間剣術を兵法と心得違ひ、某技藝をなす者とをよへて各剣術の妙をもて、其業を試んこそ、其故なきにあらず。然共天下を廣大なり。能者ハ業を隠して大場に用、みだりに人に對せる者ハちる人業の未熟なるよる志あれハ万人を伏せしむとも、皆未達の人也。大丈夫の志所にあらず。去れど、業ハ其心に徹するを極こそ、早く名君を撰て仕へ、大場を踏んで國家の為に其業を尽さんハ、大なる修行なるべし。みだりに人に勝を以て専とし、廣く恨を人に結時ハ、必死所を得ざるを知べし。和漢其證あげて算ふべからず。これより心を改て、一色氏諸共に世に立の工夫こそ、あらまほしけれと語りされバ、両人案に相違して、心中深くこれを恐ゝ。

あらハ貴所の業とする所ハいかなる術ぞや。主人笑て某が術ハ日本を掌中に見得し天下諸将の賢愚我辨じ世の英雄を居ながら知て戦へハ必勝。攻れハ必取る、小軍を以て能大軍を破り弱を以てよく強を制す。此外に知るよしなし。両人笑て足下其ごとくの軍略あらバ何ぞ進て仕官し其術をあらハさゞる。答曰用れバ鼠も虎となり、用ざれバ虎も鼠となる。吾を用る人恐らくハ今の諸侯になし。然共幸て明君に遇て君臣の約をなせり。各も久しからずして。膝を組て朋友となるべし。先見尼者の及所にあらず。数日を経て吾詞の違ざるを知給へや、辨舌者がさめく二人も酒に酔たる心して一言の返答に及ず。暇を乞て立出れバ長尾も是を止めず。又こそ對面の時あらんと、坐を起て奥へ入ぬ。両人茫然として宇都宮に立帰り、一色に逢て右の次第を物語れハ、太郎左衛門大に怒り、鬼髭逆様になりて、なまぬるき腐儒者、辨舌を以て武術をなみす。只一討に打殺して浮目を見せんと立上れハ、血気の両士大に悦び、先刻の意趣返しに頬骨を切んと、二人とつくと食事をとゝのへて、暮るゝより急ぎ行。危かりける次第なり。極月廿日の夜長尾が家に立よれハ、月影あかりて明なり。垣根の木戸より門を伺へバ、長尾燈火に向て書を讀む影障なりしが、長尾が声にて、あら笑止や命しらずの曲者共、二人迄忍来れり。一々に擒捕んと、燈打消て其後音もなし。二人思ひよらず顔見合如何ハせんと思ひなれ共、角と忍来をあくや帰んハ彼がたからん所も

面目なしと、一色大音上て、先刻の両人共に一色太郎左衛門手練の業を見せんが爲、殊更なぶらせたりと呼れハ、障子の内よりもよしなき袖立、武士の所業にあらず、此長尾が居宅ハ金城万里、数百の人数を以て攻るとも恐るべき所なし、況や三人の溢れ者、立所に召捕ん、早々に立帰と、あいそうもなく云られハ、一色怒氣天にはつるのごとし。木戸を閉んとするに、堅鎖さしたり、しやをのくしやと力を入てぐつと押に、ほぞゆるみて、寛を、恐いやりと踏破、三人揃連く縁の上に飛上り、障子を開けバ、一間を隔て、長尾監物小具足に身を固め、床机に掛り、采押えて、左に臂、右に火術の具、五六挺立ならべ、郎等四人相圖をまもり、動ハ放ん勢なれハ、流石の三人飛物に心をくれ、立止てこぶしを握り、白眼詰て立たりける。監物悠々と、一人に敵することハ安く、万人に敵するハ難し。是ハ千金弩と云て、一発数百の矢あり。又これハ近頃蛮国より渡れる、鉄炮と云る器にて、火を発されハ鉄丸飛て、磐石をも打つらぬく、今三士の命風前の火よりも危し。大丈夫私の宿意に身を果し、利あらんや。各方人に超たる武勇を帯て、吾為に死を止るハ誠に犬死なり。宿意を散し和談して吾詞に従て、主人を求めハ功名天下に高かるべしと、理を尽して述られども、勇気一圖の一色、耳にも聞入ず、人間の世にある二度死することなきぞ。矢玉に中て死するハ吾〱が天命なり。矢玉たまはれバ、長尾が命一刀の下にありと、一番に飛かゝれハ、二人も同じく馳入しが、忽然として板布弛

れて、三人ながら遥の落穴へ陥たり、一色穴の内より躍上く掛よるを、長尾床机の上より小腕取て投付たれども動せず、鎖を以て搦たり、小楯鹿島も足搦くわせて、同く穴より飛出るを続けさまに投倒し、三人一所に搦捕良等に命じて弓鉄を納め、座敷を元の如くにしつらひて、三人の縄を解、酒肴を取寄て長尾申けるハ、各と義を結んで、天下に大功をあらはさんこと、つねゝ心に掛れども、血気にはやる勇一度鋭気を挫かれハ、必言を入まじと察し、二士を激して今宵を待謀の偽に行たり、よしや今にして宿意ものこるまじ、共に心底をあかして交を結まんと、智者の一言に、一色殆心情をとりひしがれ、涙を流して恥しき、教訓誠に血

気の振舞、後悔謝するに所なし、何卒先生に従て明君に逢て身を立、業を顕したし、後来三人門人となり、力事御指図に漏まじと、翻然として志を改れハ、長尾殆悦にたえず、某幼年より軍術に達し、氏系正しき名将に従て、義兵を起し、天下を一度定んこと、偏に身の望あつて英士を求るに、抜群の人稀也、思ハずも今宵三英士に出会ぞ、何の幸かこれにしかじと悦ければ、三士倍心服して、城戸持廣が噂を一色申出るに、小楯も山部季照がことを語りければ、長尾打笑て既に城戸山部と某と諸共に、[illegible]成氏公の嫡孫太郎殿に従て、君臣の約をなせり、先達る三士の義気を知るといへども、吾術をあらハさずんハ心頓感伏あるまじと、かくのごとく行ありと、太郎の器量君臣

となりたるあやしく語けるぞ。三英躍上て、斯る賢君に逢こと、則ち武運の時至れり。早尊顔を拝したしと、猛気のごとく悦べバ長尾も満面に喜色を顕らハし。五英士に某采配を採り上に賢君を戴かバ。天下恐る所なし。是より各竊に上州へ到り、君の見参に入給へと云ければ、皆悦びいさみたり。重て一色尋ける、某の膂力東国に指つく者なし。然るに先生、先刻我を投出せし手段鞠を弄ぶるより猶安し。およびたゞしき力量かな、何程の限のあるを知らまほしく問ければ、長尾大に笑て、某鶏をはなぐかなし。一人の異人に逢て、唐土の拳法の術を習得たり。其力者に倍せるの功あり。足下にこれを傳ハ、虎に翅をそゆるに等しからん。皆滞留あらバ、三英士に悉くこれを傳ふべし。

各滞留の間密に上州に逗滞て君を擁して君臣の約をなすべしと云に三英聞入の気勢を得て翌日早速上州に至りて始て太郎と君臣の結をなし三英帰て其夫喜慈情に服し其志を得たりと悦べり

81

0